

K-685

河北町埋蔵文化財調査報告書第一集

# 溝延馬場遺跡

発掘調査報告書

1980

河北町教育委員会

# 溝延馬場遺跡

発掘調査報告書

昭和**55**年**3**月

# 序

本報告書は、昭和54年度に実施した、河北町大字溝延字馬場地内の「馬場遺跡」の調査成果をまとめたものである。

この事業は、県営圃場整備事業等にかかる緊急発掘調査として計画されたが、本町にとって大規模な発掘調査は初めてのことであり県教育庁文化課・村山西部土地改良事務所、大堰土地改良区などから格段のご指導とご協力を戴き、責務を全うすることができたことに、深甚なる謝意を表するものである。

遺構を概観するに県担当の「熊野台遺跡」とともに、農業生産集落群の発生を証するものがあり、米、瓜、くるみなどが出土し町民の注目を集めめた。また、古代条理制を想起させる溝渠などが発見され、更に、「紹聖元宝」や「永樂通宝」などの発見は、中世期における地方経済の一端をのぞかせるものがある。

昭和54年8月3日には、山形大学名誉教授柏倉亮吉氏を講師として「町民参加発掘の日」を設け体験学習を企図したが、町内は申すまでもなく遠く置賜地区から参加されるなど、大盛況のうちに有意義な学習を終了したことにも喜ばしいことである。

終りに、炎暑や豪雨のなかに発掘作業に協力していただいた作業員各位に深謝申し上げる次第である。

昭和55年3月

河北町教育委員会教育長

細矢敏雄

## 例　　言

1. 本報告書は、河北町教育委員会が、昭和54年度に実施した「県営圃場整備事業にかかる大坂第2地区の緊急発掘調査」の報告書である。
2. 発掘調査は、河北町教育委員会が調査主体となり、河北町文化財調査委員会が調査を担当したものであり、調査期間は、昭和54年7月23日より9月10日までである。
3. 調査員は下記のとおりである。

野川主計　木間敬義　高橋郁夫　鈴木秋子

4. 事務体制は、河北町教育委員会教育課が担当した。

総括 斎藤智勇　庶務 小山田恒吉　現場 浅黄三治

5. 遺構の挿図、拓影図、写真等は本文と同様記号で示し、出土した遺物は原寸の $\frac{1}{2}$ を基本とした。

6. 本報告書の作成にあたって、文章の執筆は、野川主計、高橋郁夫、鈴木秋子、浅黄三治、挿図および写真は浅黄透（学生）があたり、編集は、小山田恒吉、浅黄三治が担当した。

# 目 次

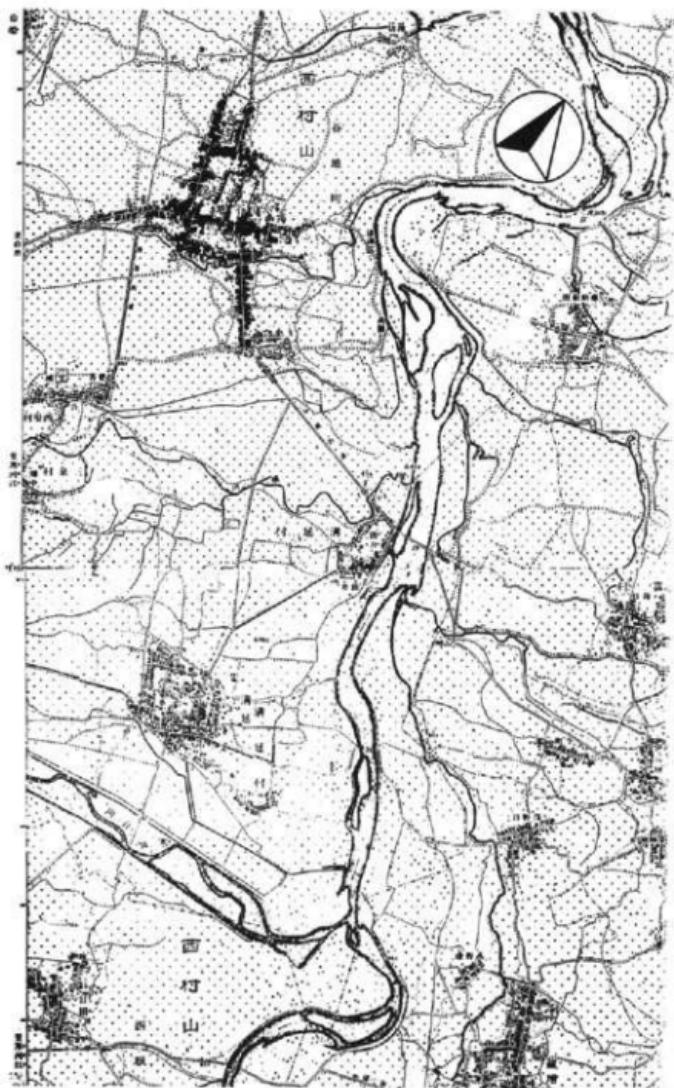
I	調査の経緯	
1	発掘調査に至るまでの経緯	2
2	調査の経過	2
II	遺跡の概観	
1	遺跡の立地と環境	5
2	遺跡の層序	6
III	発見された遺構	8
IV	出土した遺物	19
V	まとめ	26

# 挿図目次

第1図	地形図	1
第2図	遺構配置図	4
第3図	土層図	7
第4図	6号住居跡部分図	9
第5図	7号、9号倉庫跡部分図	11
第6図	10号、11号掘立柱建物部分図	13
第7図	8号、12号倉庫跡部分図	15
第8図	1号円形周溝跡部分図	17
第9図	2号円形周溝跡部分図	18
第10図	遺物 (1)	21
第11図	" (2)	23
第12図	" (3)	24
第13図	" (4)	25

## 図版目次

- 図版 1 調査区全景（発掘前、発掘後）
- 〃 2 発掘風景（町民参加発掘の日）
- 〃 3 住居跡及び柱穴
- 〃 4 復元土器 环
- 〃 5 復元土器 壺
- 〃 6 遺物（柱、古銭、種子、装身具）



第1図 馬場遺跡附近図

明治37年陸地測量部発行

# I 調査の経緯

## 1 発掘調査に至るまでの経緯

河北町大字溝延字馬場、熊野台附近の遺跡の存在については、昭和12年、奥津一郎によって報告されている（町誌）。その後、昭和32年に発刊された、町誌資料（第23集）に土師器の出土が後藤三郎によって報告されている。

昭和27年、県教育委員会が中心となり「山形県埋蔵文化財包蔵地」の調査が進められた折に、河北町においても調査団を編成し、団長、今田信一 調査員、後藤三郎 野川主計 宇野修平 高橋郁夫 佐藤信行 浅黄三治外5名を動員して、河北町全域の遺跡確認調査を実施している。その結果、39カ所の遺跡が確認された。

次いで、昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」に記載され、熊野台（450）馬場（451）として登録されたのである。

昭和53年、大堀第二地区として、県営圃場整備事業が実施されることになり、県教育庁文化課によって馬場、熊野台周辺の試掘調査を実施した。その結果、県内でも数少ない古代集落跡であることが判明し、これに基づき村山西部土地改良事務所、大堀土地改良区、河北町教育委員会等、関係機関と協議をし、緊急発掘調査を実施することになった。

昭和54年6月、河北町教育委員会もこれに並行して馬場地内の調査を進めることになり、期間も昭和54年7月23日より、9月10日までとされた。

## 2 調査の経過

### 調査日程

- 7月7日 現場事務所設営
- 7月9日 熊野台 馬場遺跡調査の鍵入式執行
- 7月23日 馬場遺跡調査開始
- 8月3日 町民参加発掘の日
- 9月10日 現地説明会 撤収

### 調査方法

- 7月23日 現地集合、県関係職員、作業員諸氏と調査の無事と協力を約束し、作業体制を下記のように決定した。

調査班を次のように編成する。

現場総括 浅黄三治（教委）  
発掘指揮 野川主計（調査団）

調査員 本間敬義 高橋郁夫 鈴木秋子

労務対策班 鈴木芳吉 清野勘一郎 鈴木キク 奥山祥光

機械班 東海林利長 真木八重子 丹野晴彦

写真班 浅黄 透 (物品調達兼)

測量班 真木正文 布川勇治

遺物班 林 郁子 工藤裕子

研修 10：00～11：30

溝延地区公民館を会場にして、発掘調査の方法について、県文化課のスライドを使用して研修をする。(講師、佐藤庄一氏)

作業開始 13：00～

調査区域の草刈作業、2m×10mの試掘地を設定し、表土を15cm下げる。トレント  
50～54～45区から鉄製クサビが出土し勇氣をあたえてくれる。

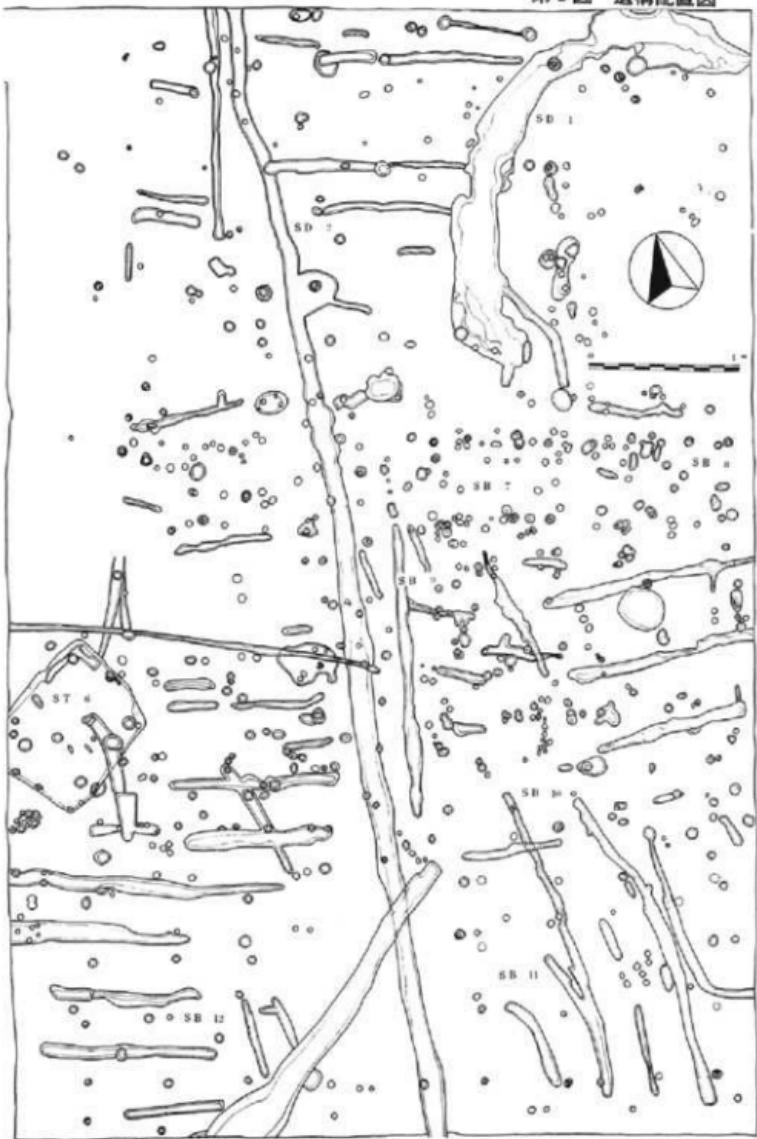
親睦会 17：00～

熊野台、馬場関係者全員現場事務所に集い、ささやかながらも乾盃。

#### 概観

遺跡を概観するに、竪穴住居跡や堀立柱建物跡などの生活跡は、馬場遺跡の東南端から熊野台地区にかけて集中している。遺跡の東北部は、耕地整理などの影響もあり、かなり搅乱された跡があり、遺物包含の可能性が薄く、結果的には発掘区域より除外した。

第2図 遺構配置図



# I 遺跡の概観

## 1 遺跡の立地と環境

山形盆地を北流してきた最上川が、大江町附近で東に流れを変えはじめる。

天童市寺津で、再び北流をはじめ川幅も増してくる。まもなく、朝日山系に源を発する寒河江川が東流してきて、本流と合流する。

この最上川の右岸には奥羽山脈がそびえ、そこからの中小の支流が最上川に合流している。これらの支流が、急峻な山腹から盆地に流れ落ちる境界線に、立谷川・乱川などの扇状地が形成されている。一方左岸には、比較的海拔の低い出羽山地が連っている。

この地域は、扇状地よりも河岸段丘の発達が所々に見られる。

河北町は、南に寒河江川、東に最上川をのぞみ、北西部を出羽山地に囲まれた、ほぼ三角形の場所に位置している。現在の提防が築かれる以前は、洪水に見舞われやすい地域で、海拔85m以内は、洪水地帯であった。

また表土の土質は、三泉から溝延にかけての寒河江川沿いは、花崗岩と安山岩を母岩とした土壤で、砂土または砂質壤土である。横川・古佐川沿いで道生から沢畑方面と両所・根際方面、最上川沿いで真木・杉の下方面が、壤質砂土か壤土である。横川と畠中・溝延に囲まれた地域は、腐植質の多い植土地で排水が悪い。この地域の溝延と谷地の中間地点に、馬場遺跡は位置している。標高90mの微高地が、横川寄り、つまり北側に張り出した先端部にあたる。

河北町内には、古墳時代前期から歴史時代にわたる、土師、須恵遺跡が多くみられる。

これらの大部分は、集落跡である。熊野台・馬場遺跡は、古くから注目されていた最大規模の遺跡である。また、西里下横遺跡からは、完形の土師器が出土している。高さ30.5cm、最大幅26cmの壺で、口縁部はわずかに外反し、折り返し口縁になっている。肩部には、細かい柳目文がみられ、肩部に崩の圧痕が見られる。このほかにも花ノ木・不動木・月山堂・荒町・若宮八幡・所岡遺跡などがある。このように多くの集落地がありながら、本町内からはまだ古墳が確認されていない。近隣では、河島山古墳群・高瀬山古墳・大塚古墳などが明らかである。

また、本県では9世紀前半に入ると、須恵器の生産が開始されていること、須恵器遺跡の近辺に古窯跡が認められることから、本町内でも古窯跡が存在する可能性があると思われる。しかし、これも現在のところ確認するに至っていない。

## 2 遺跡の層序

遺跡は、南（溝延）から北（榎川）へ、わずかに傾斜した面にひろがっている。遺跡の立地している地層は、すべて沖積面で、調査によって5枚の層が認められ、上からI～V層にわけた。

### <第I層>

第I層は、現在の水田の耕作土で、暗褐色を呈し、層の厚さは12～18cmある。一部の地点で薄くなる部分も認められただ全体に分布している。

### <第II層>

第II層は、黄灰褐色で、第I層にくらべてしまりがある。土質は微砂質土で、黄砂が全層にわたって混入している。厚さは、4～10cmで、比較的薄く、平安時代から室町時代の遺物が出土している。

### <第III層>

第III層は、暗灰褐色で、しまりはあるが、細砂質土なので、第II層にくらべてやや崩れやすい。部分的に、炭化物粒子を含むところがある。層の厚さは8～18cmである。

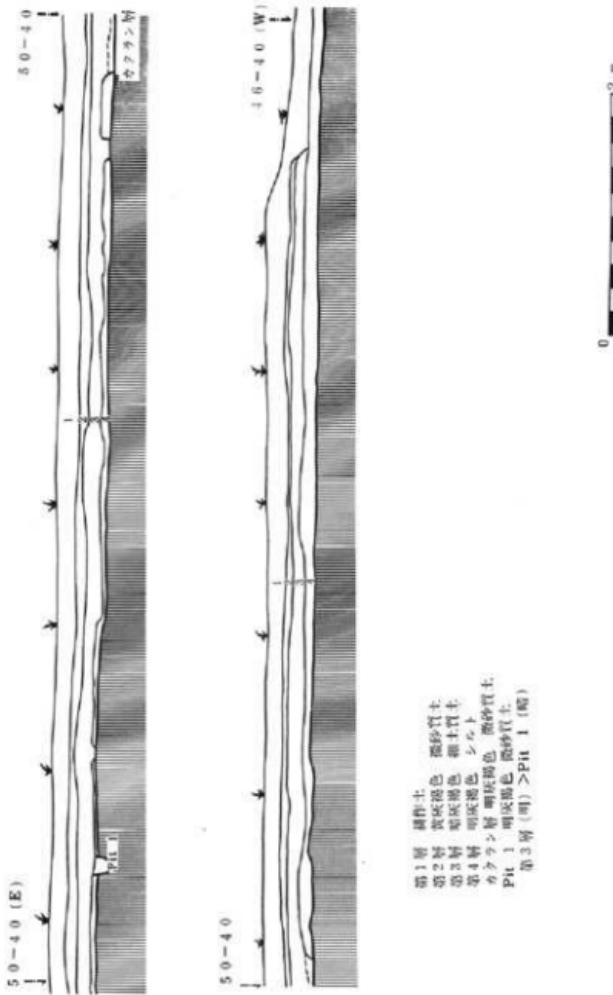
### <第IV層>

第IV層は、明灰褐色を呈するシルト層で、層の厚さは2～8cmの薄さである。全体的にしまりがあり、酸化鉄が混入している。この層に、古墳時代前期の土師器が含まれていた。

### <第V層>

第V層は、明灰褐色を呈しているが、第IV層との差違は、土質が微砂質土からできていることである。全体的にしまりがあって、酸化鉄を含み、第IV層の明灰褐色のシルト層上の混入がみられる。出土遺物は、この層ではほとんど発見されていない。この下層には、暗青灰褐色粘質土が続いている。

第3図 土層図



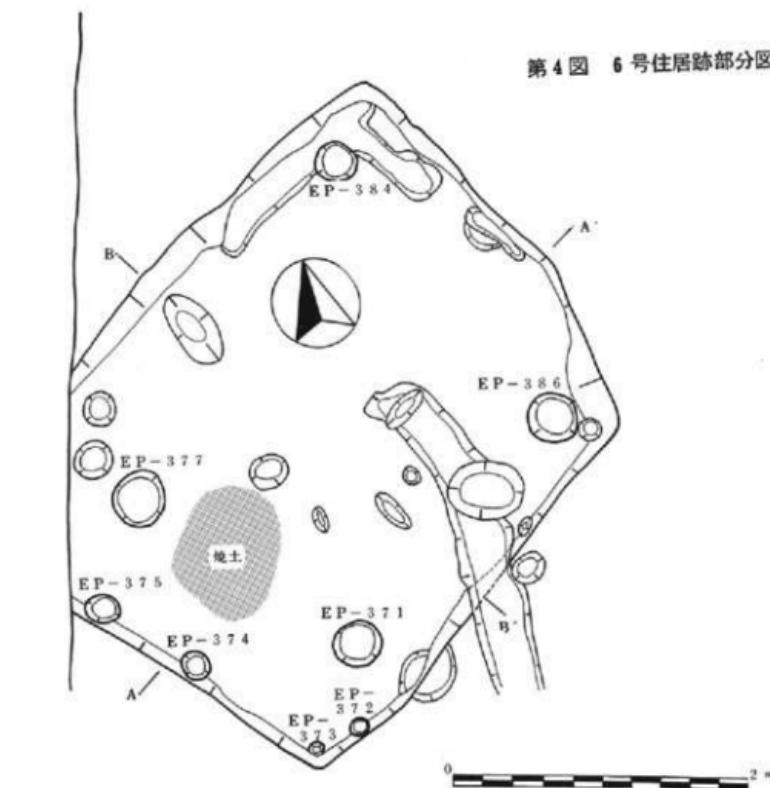
## III 発見された遺構

馬場遺跡で確認された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・倉庫跡・土壇・溝跡・柱穴群などである。

### 6号住居跡 (S T 6)

本遺跡で発見された唯一の竪穴式住居跡である。精査区域の中央西端にあり、住居プランは東南壁 3 m 北壁 3.3 m 西壁 3.2 m の不整方形を呈する。西壁が磁北より 43 度西にふれており、ほぼ北北西方向をさす。四隅に柱穴があり、直径 30 cm から 34 cm の大きさである。住居跡の中央部南壁寄りに雪ダルマ状のビットが発見されたが貯蔵穴と考えられる。その中から古式土師器が発見されている。掘り込みは浅く、周壁は、6 cm ~ 12 cm である。住居跡内からはカマド及び炉跡は検出されなかった。

第4図 6号住居跡部分図



第1層 噪灰褐色 細砂質土

EP-242

I層 黑褐色 細砂質土

II層 噪褐色 細砂質土

EP-243

I層 黑褐色 細砂質土

II層 噪褐色 細砂質土

EP-245

I層 噪灰褐色 細砂質土

II層 噪灰褐色 ブロック状の黒色土

Pita 燃褐色 細砂質土

第1層(明) > EP-245

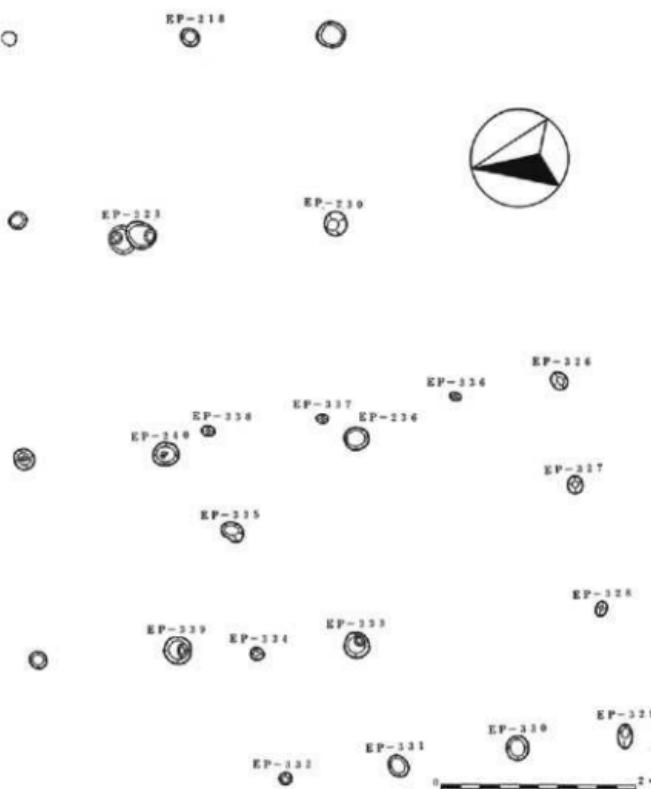
### 7号倉庫跡 (S T 7)

6号住居跡より東へ8mの地点にある。平面プランは南北が磁北とほぼ一致しており、東西 6.5 m、南北 3.4 mの長方形である。南北2間、東西3間であるが、南北がもう1間南にのびる可能性がある。柱穴の直径は 20 cm～ 28 cmであり、S B 7の柱穴からは、柱の根元が残って発見された。直径 9 cmの丸い柱の先がとがっていた。木材質は不明である。この建物は東西に切妻をもつ倉庫跡とみられる。

### 9号倉庫跡 (S B 9)

7号倉庫跡と切り合っており、発掘地点の真中を南北に走る溝状造構を西面がまたぐように位置している。プランは東西 3.6 m・南北 3.7 mのはば正方形を呈する。南北の線はほぼ磁北をさしており、7号倉庫跡よりやや東にずれる。南北3間、東西3間であり、柱間は、1.2 m～ 1.4 mとせまい。また柱穴の直径も 10 cm～ 16 cmと小さい。建物内部の柱が検出されていないため、倉庫跡とするかどうか疑問が残る。

第5図 7号、9号倉庫跡部分図



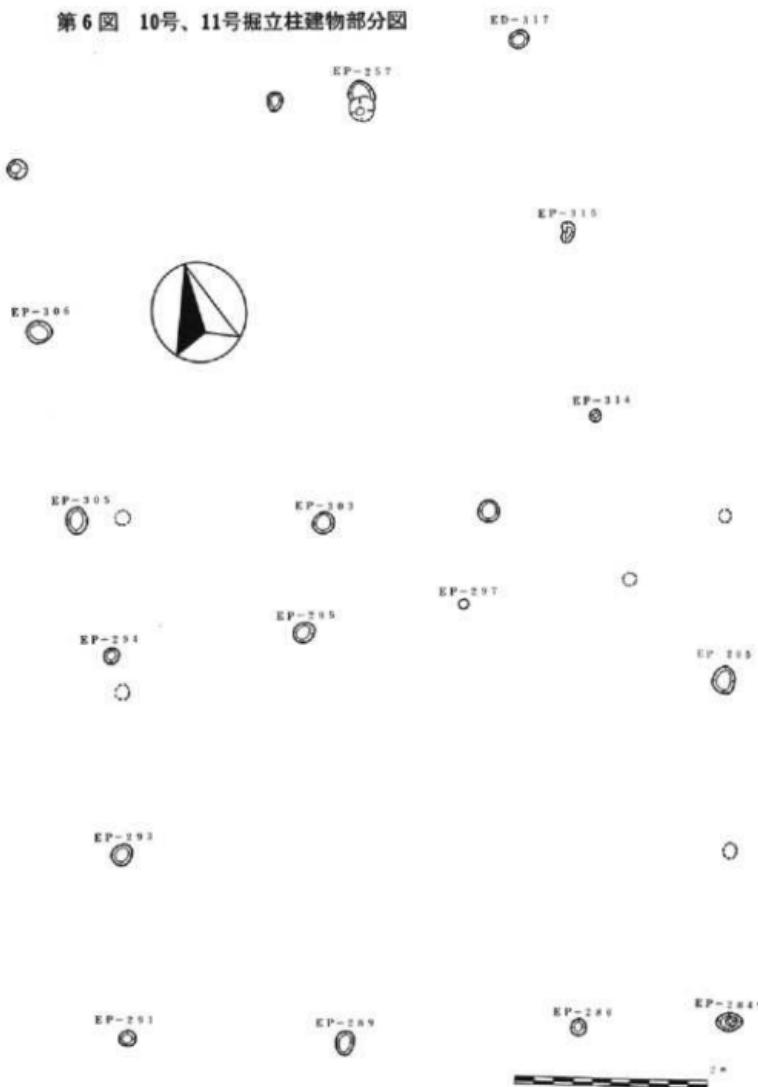
#### **10号掘立柱建物跡 (S B10)**

9号倉庫跡の南 3.1 mの地点にある。プランは東西 5.4 m、南北 5.7 mの方形である。南北は7号倉庫跡と一致し、南に5.2 mずらした位置である。柱穴の直径は 12 cm～24 cmとさまざまである。この近くから「紹聖元宝」(北宋錢)が出土している。

#### **11号掘立柱建物跡 (S B11)**

10号掘立柱建物跡と切り会う形で南に位置している。平面プランは東西 6.3 m、南北 5.4 mの長方形である。南北の線は磁北より東へ18度ずれており、この向きは8号倉庫跡とほぼ一致している。東西3間、南北3間である。柱間は 1.8 m～ 2.4 mである。柱穴の直径は、 16 cm～ 20 cmであり、すべて丸柱である。

第6図 10号、11号掘立柱建物部分図



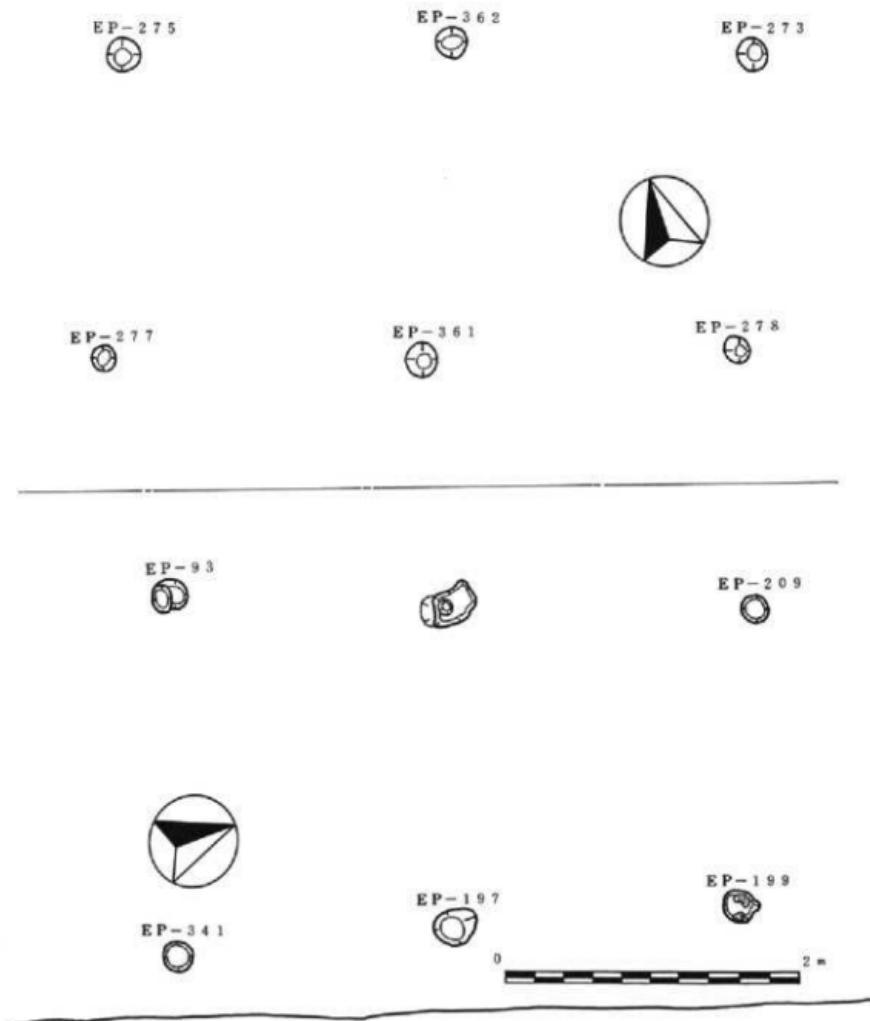
### 8号倉庫跡（S B 8）

7号倉庫跡より東へ 1.4 m の地点にある。南北の線が磁北より東へ 18 度ずれる。平面プランは東側が未発掘のために確認できないが、ほぼ正方形と考えられる。南北 4 m・東西 4 m (?) の 2 間×2 間の倉庫跡である。柱穴の直径は、16 cm～20 cm で掘立柱である。

### 12号倉庫跡（S B 12）

11号掘立柱建物跡と南北に走る溝状遺構をはさんだ対称的な西側に位置している。現在までに確認されているプランは東西 2 間、南北 1 間である。南北が磁北より東に 20 度ずれているが、8号倉庫跡、11号掘立柱建物跡と向きがほぼ一致している。東西が 4.3 m、南北が 3.2 m ある。建物の規模は 8 号倉庫跡と似ているものと考えられる。とすれば 2 間×2 間のプランを想定するとこの南側に 2 間柱列が存在するはずであるが、未発掘地点にかかるために確認できない。また建物内部に柱があることになり、倉庫跡と考えられる。

第7図 8号、12号倉庫跡部分図



### 1号円形周溝跡（S D 1）

精査区域の北側に位置しており、発掘によって確認した形状は半弧状である。最大幅 1.5 m、最小幅 0.5 m の不規則な幅で円弧をなしている。断面は皿状をなし、中央部で深さ 16 cm あり、全体的に浅い溝である。溝中の土質は微砂質土で、その中に炭化物・酸化鉄が見られ、さらに焼土がブロック状に混入されている。周溝の中には 39 本の柱穴が認められたが、周溝との関係を明らかにすることはできなかった。ただ内部の南区域から少量の骨片、骨粉とホーロー質の認められる犬歯（人歯の判別不可能）が検出されている。この円形周溝の性格については判然としないところが数多くある。その 1 つは東端がどこまで続かという問題である。状況から見て半弧ないし馬蹄形の形状と考えられる。次に周溝内から数多くの炭化物が検出されており、また東端附近に焼土が集中していることは、何らかの目的で火を焚いたと考えられる。この遺構は馬場、熊野台遺跡の北端でしかも最も低いところに位置している。先に述べた内部から骨片および歯の出土例と考えあわせると祭祀遺構か墓地、または狼火場とも考えわれる。しかしこの考え方を裏づける資料に乏しいために今後の研究に待ちたい。

### その他の遺構

#### (1) 柱穴群

発見された柱穴の総数は 283 であるがほとんどが丸柱である。このうち確認された建物跡は、6 栋のみである。いずれにせよこれらの柱穴群が構築された根拠になるのだからどのような組合せになるのか、そしてどのような建物になるのかまだ確実な検討ができるいない。

#### (1) 溝跡

今回の調査で多数の溝跡が発見された。SD 1 と SD 2 を除いてすべて雨落ち溝と考えられるが、住居跡、倉庫跡、建物跡との関連づけられるものは皆無であった。また柱穴群の中には柱列の方向と溝の方向が平行関係にあるものが見られ、両者の間には時期的に同じものと推察できる。これも今後の研究課題としたい。

SD 2 については最大幅 80 cm、最小幅 34 cm で、断面は凸レンズ状を呈して全体的に残したい。方向は磁北より 5 度位東にずれている。北限はもう少し伸びるようであり南限は熊野台遺跡に及んでいる。

この溝とほぼ平行している 7 号倉庫跡、10 号建物跡との時期的なつながりが考えられるが、その性格については不明である。

第8図 1号円形周溝跡部分図

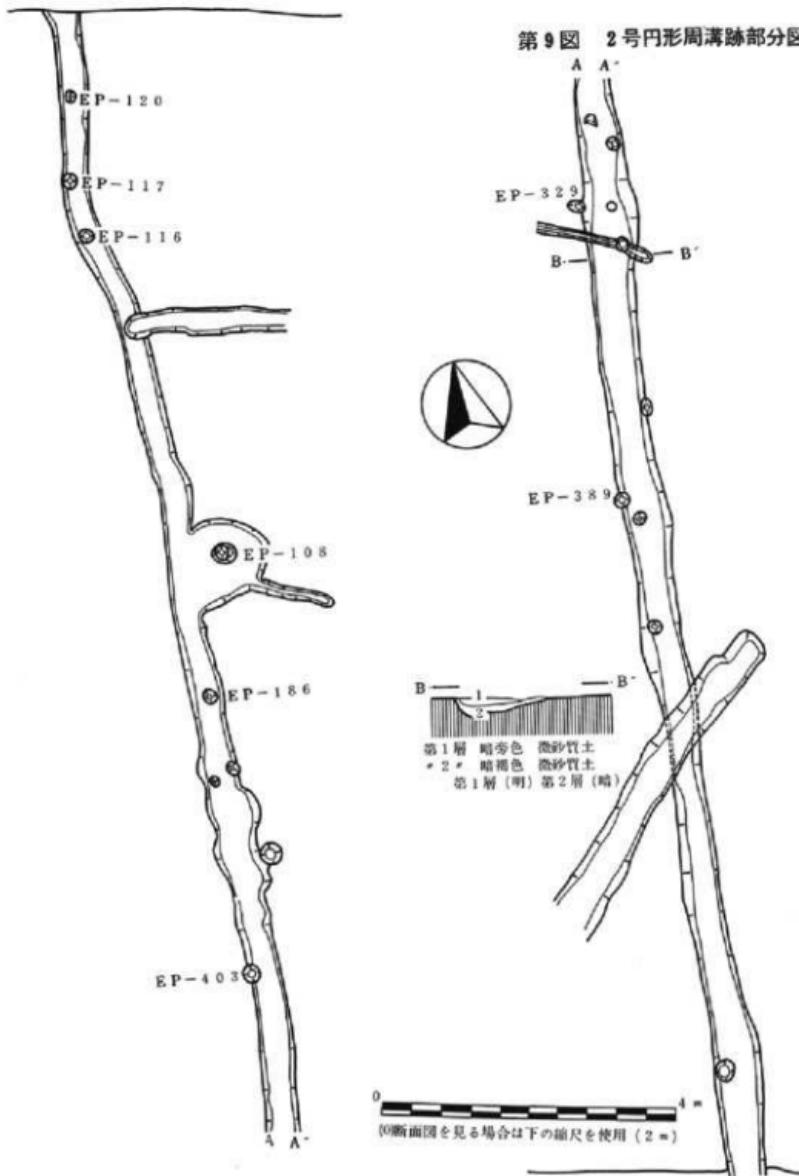


(ウ) 土壙

S B 11の東4mの位置にある土壙は、直径 1.2 m の円形のものである。当初は井戸跡を想定していたが、深さ 30 cm位で地山につきあたった。

この土壙と関連ある住居跡は明らかではかいが、貯蔵穴と考えられる。この他には不整形で極めて浅いものが発見されているが、土壙とはいえない。

第9図 2号円形周溝跡部分図



## IV 出土した遺物

出土した遺物は整理箱にして約16箱である。内容は土器が大半であるが他に古錢、植物の種子、動物の歯、土製紡錘車、鉄製品、石製品、加工木、等で遺構や土壤から炭化物と共に発見されている。

土器は完形の物が少なく、復元によるものが大部分である。その他復元可能な物、口縁部底部等の破片10個体ほど、残部は小破片でポリ袋に入れ20袋程度である。

年代的には古墳時代～室町時代に至る約1,000年に渡る長い期間の土器が発見されている。

(須恵器) 奈良時代～平安時代(今から約1,000年前) 土器と、大陸から伝えられた技術で製作された青灰色の須恵器がある。器形は壺、高台壺、蓋、甕、壺、鉢、等があり、完形の物は少なく、多数は破片で復元によるものが多く、成形から調整に回転ロクロを使用し、底部に糸切調整とヘラ削り調整、不調整の3種類あり、我形に輪積法と回転ロクロ用のものも見られ調整の工程で器体の表面と器内に、叩目文、同心円文、櫛目文、蓮状文、縦、横、斜、線の痕がある土器も出土している。焼成は登窯で1,000度以上の温度で還元・焰による。色調は灰白色、灰褐色、青灰色等である。

### 第10図 須恵器

出土する土器の内、壺が最も多く11個、高台壺2個、蓋3個、壺大形1個、中形1個計18個である。

出土状況は遺構、土壤、溝、等の内外より出土し、器形の整ったものは高台壺小形1個だけで、後は復元によるものであり、明確な測定は出来ないが、例をあげれば底径8.6cm口径13.8cm器高3.6cm、焼成は軟質で色調は灰白色を呈する。

回転ヘラ削り調整で平底、第10図の1,2,3も同じ技法である。

第10図の4は底面糸切調整で、軟質、灰白色である。5は底面糸切調整で、硬質、6はヘラ削り調整で底面ヘラ削り、硬質、青灰色7は底面糸切調整で硬質、灰褐色、8は高台壺でヘラ削り調整、硬質、青灰色である。

### 第11図

1. 壺 5 D-34-II出土。中型壺、底径9.0cm口径10.6cm、器高17.6cm脇部径19.5cm、肩より口縁部迄の高さ2.4cmを測る、器壁0.4mm～0.5mm程度で底面は糸切調整で器体は回転ロクロ使用である。

焼成は良好で色調は青灰色、肩部一帯に灰色の斑点あり器形全体に横線が見られる。

2 坯 SD-34-II出土。小型高台壺(完形)。

底部7.0cm口径10.4cm器高4.6cm、焼成硬質、色調青灰色、回転ロクロ使用ヘラ削り調整。

3 壺 SD-I出土。大形壺、底部8.4cm口径17.2cm器高30.4cm胴部径26.5cm、肩より口縁部高さ2.9cm復元によるもので、形成から見て底面は糸切と思われる。器形全体は回転ロクロ使用ヘラ削り調整で胴下部に叩目痕がある。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。

4. 坯蓋 RP-8 径15.5cm器高3.5cmつまみ径3.2cm回転ロクロ使用ヘラ削り調整、焼成硬質、色調青灰色。

5. 坯蓋 52-38出土。径13.9cm器高3.0cmつまみ径3.4cm回転ロクロ使用ヘラ削り調整  
焼成硬質色調青灰色。  
(実測図参照)

(土師器) 古墳時代～平安時代まで統いて製作された、黄赤色の素燒土器の総称である。

土師器は弥生式土器と同様輪積法、巻上げ法などの原始的な技法で成形され、ロクロ調整のものもある。底面に糸切とヘラ削り調整と木葉圧痕のものとあり、胎土は良質の粘土を使用している。

器形は壺、蓋、碗、甌、壺、壺、祭祀用には壺、高台壺、器台、等でいずれも破片であるが、完形のもの2個出土している。後は復元によるもの4個程度である。

成形～調整の工程で切離しに底面糸切と、ヘラ削り、ヘラ磨き調整の痕が認められる。土器の表面と器内外に、刷毛目、櫛目、籠目、蓮目、縱線、横線、斜線、等各種の文様があり、底面は糸切、ヘラ磨き、席状圧痕、木葉圧痕、等がある。

焼成は酸化焰によるもので、大規模な窯はまだ使用されて居らず色調は黄赤色～黄褐色が多く、軟質である。

第12図

1. 甌 49-39-III出土。中形壺 $\frac{1}{2}$ 復元底径7.0cm胴部径12.0cm成形、巻上げ技法で底面糸切調整である。軟質で色調は褐色を呈し、胎土は砂粒が多く含まれている。

2. 壺 52-32-III出土。中形壺 $\frac{1}{2}$ 復元、底径7.1cm胴部径12.6cm。技法は1と同様の調整である。

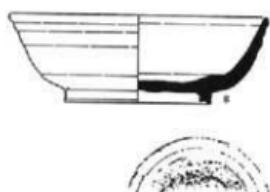
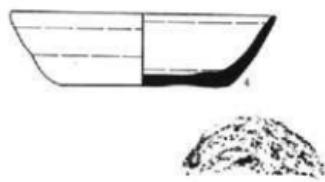
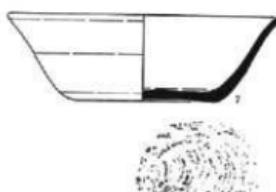
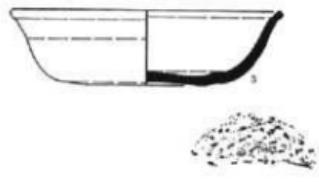
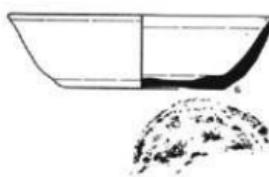
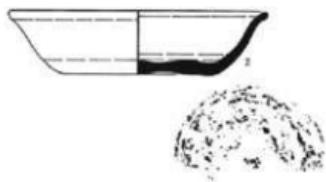
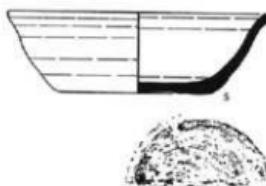
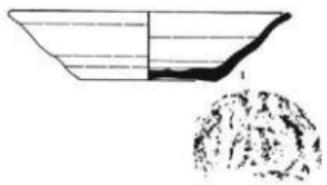
3. 碗 50-55-III出土。口径14.0cm底径7.8cm器高5.9cm平底、内面に黒色化処理が施されている。器体はヘラ磨き調整と見られ、焼成は軟質で色調は黄褐色である。

4. 壺 SD-F I出土。(完形)

底径7.2cm口径8.6cm器高6.5cm胴径9.5cm口縁径10.6cm、底中央に径0.5mmの穴が貫通している。

5. 器台脚 RP-4 (ST-47 II出土。底径3.8cm上部径3.0cm器高7.6cm、底中央に径1.0cmの穴あり、深さ1.2cm丸胴形。焼成は軟質で色調は黄褐色を呈する。

第10図 遺物 (1)



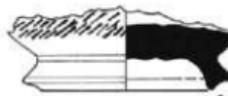
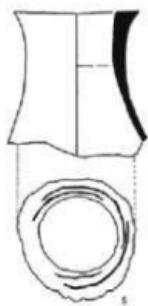
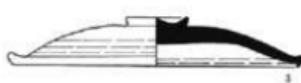
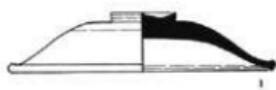
1. SP-38-F 1  
2. SD-38-II  
3. RP-38-II (ST-47)  
4. ST-32-II

5. RP-39-II (ST-49)  
6. RP-7-II  
7. RP-41-II (ST-47)  
8. RP-4-II

— 20 —

6. R P-2 出土。同形式のもの 3 個出土している。
7. 古銭、永楽通宝、径 2.5 cm 厚 0.1 mm 暗緑色、1,408 年、明の永楽年間に鋳造された銅銭で日本に輸入されて、流通したものである。
8. 古銭 紹聖元宝 径 2.5 cm 厚さ 0.1 cm 暗緑色 10号倉庫跡近くから 1 枚発見されている。これらは中国から輸入された北京銭で、初鋳年代は 1094 年にあたる。古銭は県内でも各種の輸入銭とまとめて発見される場合が多く、実際にはこの古銭が使用された時代はかなり新しくなる事であろう。
9. 紡錘車 45-49-30-35 III 出土。長さ 4.3 cm 径 2.0 cm 中央に径 0.6 cm の穴が貫通している。軟質で、黄赤色で、両端はいくぶん細くなっている。器形は磨滅して全形は変形している。他に瓶の把手が 3 個出土している。
10. 種子、くるみ、E P-151-F 1 高さ 2.9 cm 横 2.5 cm 2 個出土している、色は茶褐色を呈している。
12. 壺、R P-1 小形壺（完形）  
口径 3.0 cm 器高 2.6 cm 丸底胴部径 5.5 cm 口縁部径 3.8 cm 器壁 0.4 mm 焼成やや硬質で色調は赤褐色、土器表面に丹塗りが施されている。ヘラ磨き調整のもの。
13. 石製品、菅玉 1 個と丸玉 1 個が発見されている。昭和 53 年の第 1 次発掘調査の後基盤整備の場所から、竹田 孝君が発見したもので、菅玉は長さ 0.7 mm 径 0.6 mm 中央穴の径 0.2 mm 緑色に小さな灰色の斑点がある、滑石製で、穴は両端からあけたものである。  
丸玉は高さ 7 mm 径 8 mm 中央穴の径 2 mm で色は群青色、ガラス製である。（吹玉）。装身具として使用されたもので、年代は古墳時代に属すると見られる。
14. 加工木、S B-7 倉庫後の穴から、柱の一部が発見され、長さ 32.0 cm 丸柱で先が尖っている。色は黒褐色に変化し海绵状態で、材質は針葉樹と見られている。
15. 木 片 45-54-55-III トレンチ内より出土した長さ 2.0 cm 巾 7.0 cm 厚 0.3 ~ 0.5 mm 程度のもので、5 ~ 6 枚出土した色は茶褐色を呈す。材質は杉の類で、刃物で割った様な痕跡がある。
- その他  
50-54-45 III 層から鉄セン、鉄鎌等が出土しているが、いずれも時代的に新しい物である。なお、寛永通宝等も 2 枚ほど出て居るが、これは表土下から発見したものである。  
器壁は 0.4 mm を測定し、焼成は軟質で色調は黄赤色を呈する。調整は巻上げ技法によるものである。

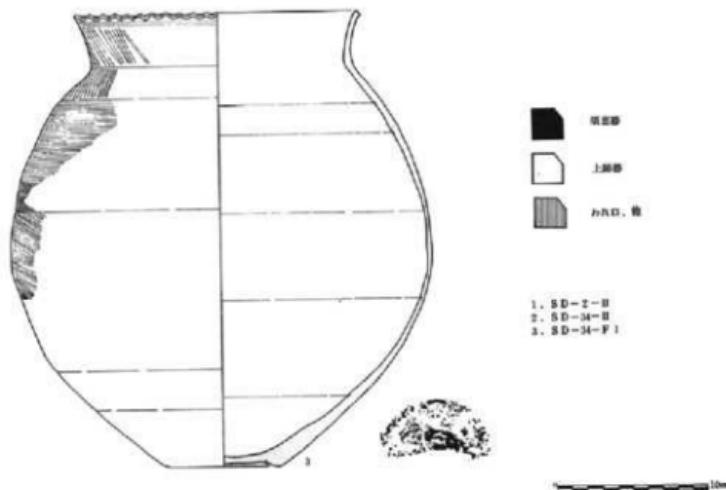
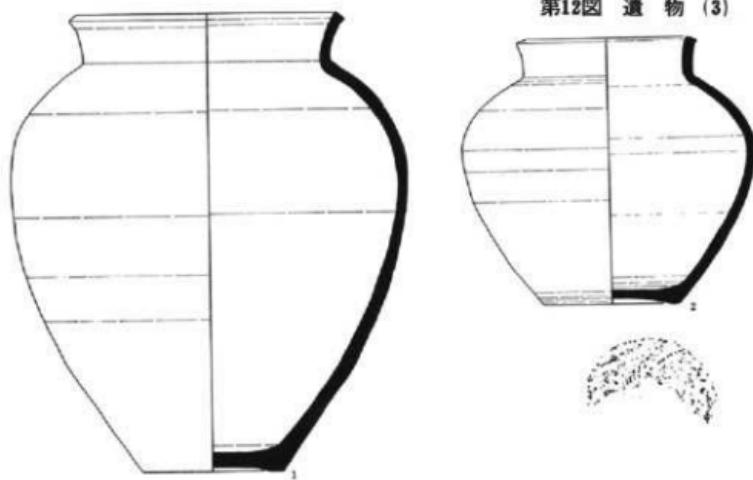
第11図 遺物



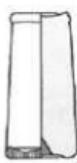
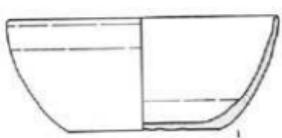
- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 1. 32-38-II | 5. 3D-2-II        |
| 2. 32-38-II | 6. 47-21-II       |
| 3. 3F-8-II  | 7. 45-48-49-45-II |
| 4. 3D-2-II  | 8. 47-21-II       |

0 10-

第12図 遺物 (3)



第13図 遺物 (4)



- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 50-55-II             | 5. R.P.-4-II (S.T.-47) |
| 2. 52-32-II             | 6. R.P.-37B-F 1        |
| 3. S.D.-34-F 1          | 7. R.P.-2-II (42-38)   |
| 4. R.P.-36-II (S.T.-47) | 8. R.P.-1 (40-34-III)  |

10mm

### 第11図 実測図 須恵器

#### 5. 壺口縁 SD-2-II出土。

口頭部下経 7.5 cm 上経 6.5 cm 焼成硬質色調青灰色、粗製品であろうか。

#### 6. 壺蓋 47~21-II出土。蓋の取手上部経 3.2 cm 高 1.8 cm 宝珠形、硬質、灰白色。

7. 底 45~49-40~45-III出土。底経 10.8 cm 高 3.5 cm、壺の底部である。焼成硬質、色調青灰色、色ヘラ削り不調整と見られる。

#### 8. 底 47~21-II出土。底経 6.6 cm 高 1.7 cm 硬質灰白色高台壺の底と思われる。

### 第12図 実測図 土師器

#### 3. 壺 SD-34出土。底経 7.0 cm 口経 19.0 cm 器高 35.0 cm 成形～調整、巻上げ手法。

器表面に刷毛目の痕があり底面へラ削り調整、口唇部波状形の模様があり、口縁部に 2 条の沈線が入り下に斜線が入っている。口縁部は外反し、胎土に砂粒を多く含み軟質で色調は黒褐色を呈する。器壁は 3 mm ~ 6 mm を測る。

### 遺構記号

SD～溝 SP～ピット RP～土製品 EP～遺構 SK～土壤 ST～堅穴 SB～建物

## V まとめ

馬場遺跡で確認されたものは、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、倉庫、土壤、溝跡、柱穴群などである。堅穴住居跡は、発掘区の中央西端から 1 棟発見されたが、馬場遺跡では最も古い古墳時代前期に属するものである。ほぼ方形を示し、規模は南北 3.3 m、東西 3.8 m となっており、柱穴は 4 隅に 4 本あり、カマドや炉跡は認められない。

掘立柱建物跡は、全部で 6 棟発見され、うち 4 棟は、内部にも柱穴が認められるところから、倉庫跡とみられる。

倉庫跡は、2 × 2 間のもの (SB 8.12) と 3 × 3 間のもの (SB 7.9) とがあり、いずれも方形を示している。第 7 号倉庫跡 (SB 7) の柱穴からは、柱の一部が発見されている。直径 9 cm の丸柱で、先が尖っているところから察するに、加工されたものと窺われる。

2 棟の切妻式の掘立柱建物跡は、3 × 3 間の方形のもの (SB 10) と 2 × 3 間の長方形のもの (SB 11) とがある。この他にも、たくさんの柱穴や雨落ち用の溝が発見されており、今後詳細に検討することにしたい。

さらに、最上川中流部、須川の両岸に大規模な条理制が施行された事実が、山形県教育委員会文化課の成果によって明らかにされた。

本町内の溝延部落の北西部に「一の坪」の地名が残存しており、集落跡との関連と農耕社会の発展の様相が明らかになってくるはずである。

# 図 版

図版 1



調査区遠景（発掘前）



調査区遠景（発掘後）

図版 2



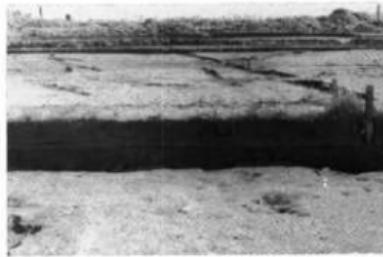
発掘風景



発掘風景



土器片の出土状況



東西土層セクション



県民参加発掘の日



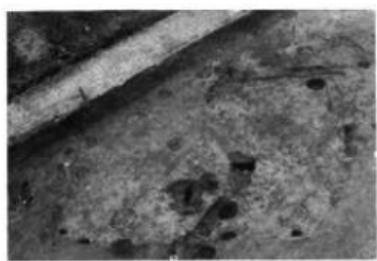
県民参加発掘の日



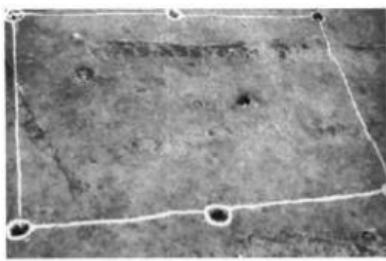
SD-2 と SD-1 の 4



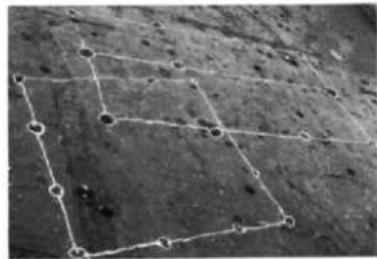
SD-1



6号住居跡



12号塹立柱跡



7号, 9号塹立柱跡



10号, 11号塹立柱跡

圖版 4



1



5



2



6



3



7



4



8

図版 5



1



3



2



4



5



圖版 6



1

3

4



2



5



6



7



8

9



10



12



11



13



14



15

河北町埋蔵文化財調査報告書第1集

馬場遺跡  
発掘調査報告書

昭和55年3月28日印刷

昭和55年3月31日発行

発行 河北町教育委員会

印刷 株式会社田宮印刷所